

全国発芽マップ 2000 プロジェクト ～ 拡がる仕組みへの取り組み～

宮崎大学教育文化学部附属小学校 中西 英
nakanisi@fes.miyazaki-u.ac.jp
宮崎大学教育文化学部 中山 迅
e04502u@cc.miyazaki-u.ac.jp
(株)宮崎県ソフトウェアセンター 井上英幸
hide@miyazaki-nw.or.jp

キーワード 拡がる仕組み、インターネット、交流、電子メール、face to face、児童・生徒の直接対話

1. はじめに

1995年の春に始まった全国発芽マップは、当初の予想を超えた、活発で息の長い活動として今に至っている。

2000年度は、子どもたちの対話と協働的な学びの道具としてインターネットを利用する教育活動の雛形として「全国発芽マップ」を位置づけた。そして、この企画を発展させると同時に、この企画をきっかけにして新しい協働学習の企画が生まれてくるような仕組みづくりを目指して、協働実践プロジェクトを遂行した。

2. 今年度の活動の流れ

インターネットを活用した協働学習という意味では、今年度の活動には昨年までと比較して根本的な違いは見られなかった。

しかし、「拡がる仕組み」への示唆となる顕著な取り組みが行われた。発端は、北海道勇払郡鶴川町立花岡小学校の宮脇公治先生が、参加校のクリッカブルマップを自校のホームページ上にアップして、宮崎大学の中山が「宮脇先生の以下のページを開いてみました。何と、現時点でのクリッカブルマップができています。ありがたやありがたや。<http://www2.ocn.ne.jp/~hanaoka/hatuga2000.html>」とMLに投稿したことである。以降、MLには「学校名の読みが分からないので、よみがなをつけてもらいたい」「正確な読みをMLに流してください。」などの書き込みが盛んになった。さらに、全国発芽マップの参加校数や空白県が可視的になったため、「あと 校で 校達成」とか、「全国制覇まであと 県」などの呼びかけが盛んになり、参加校拡大に向けて参加者の意識が盛り上がった。その結果、参加校数は急速に増加し、5月末には100校となり、現在では160校を越えている。この数は、昨年の3倍以上である。

これは、参加者のイニシアチブが活動の原動力となるという、全国発芽マップ文化を象徴する出来事であった。

3. 全国発芽マップの集い

ネットワーク上の活動とface to faceの活動をつなぐことによって、ネットワーク上の活動をいっそう深化・拡大することを目的として、2000年11月11日(土)に「全国発芽マップの集い」を宮崎市で開催した。これは、全国発芽マップの代表的な参加校が一堂に会して交流・協議を行う初めての試みであった。内容は、以下の通りである。



- ・ 基調講演「コミュニケーションと子どもの学び」 美馬のゆり（はこだて未来大学）
- ・ 事例発表
 - 「小規模校における『発芽マップ』の取り組み」 宮脇公治（北海道・花岡小学校小学校）
 - 「ケナフから環境を考える子供たち」 深井美和（富山県・水橋中部小学校）
 - 「夢！全国発芽マップから世界発芽マップへ！！」 井柳 強（静岡県・地球クラブ）
- ・ パネルディスカッション『子どもにとっての全国発芽マップとは』
 - コーディネータ 中山 迅（宮崎大学）
 - パネリスト 谷本泰正（岡山県・岡山芳泉高校）、中嶋弘行（京都市・朱雀第二小学校）
根井 誠（宮崎県・椎葉中学校）、水野宗市（宮崎県・本郷小学校）
安富直樹（横浜市・神大寺小学校）
 - コメンテータ 美馬のゆり（はこだて未来大学）

E スクエア・プロジェクト成果発表会

集いの参加者は約 100 名にのぼり、これまでの全国発芽マップで培ってきた実践をもとに、活発な協議が行われた。ここでは、栽培する植物などの「自然」、あるいは、インターネットを通して接する「人々」から直接学ぶということが再確認された。そして、「すべての活動を参加者がつくっていく」という全国発芽マップの文化がいつそう広がった。

4．児童・生徒の直接対話を促すシステムの開発

発芽マッププロジェクトの大きな課題の1つとして『児童・生徒の直接対話による協働学習の実践』がある。現在までの活動は、“先生”を中心とする大人が媒介として存在し、児童・生徒の活動、ひいてはアイデアや発想といったものは、すべて“先生”を仲介し伝達されていた。学校のインターネット環境や現実的な運用体制を考慮し、児童・生徒の直接対話による協働学習を実現するため、今年度の事業で、Web を用いたコミュニケーションシステムの開発を行った。

このシステムを開発する上で考慮したのは、既に160校を超える学校が参加し、今後もその数が増えて行く方向にあることと、継続的な運用予算が当てにできないこと、これらを踏まえ、いかにして参加者自身（先生たち）で運用可能な管理機能を提供することができるかに注意を払った。

機能的には、各学校ごとに活動する「成長/活動の記録」と、様々なコミュニケーションの場を提供する「ミーティングボード」の2つの機能で、それぞれの最小単位を「コミュニティ」と定義した。

すべてのコミュニティで“ユーザ”という定義を統一し、その中で、ボードの発行（新規に作る）から発言や記録の削除など、あらゆる操作を可能とする“総合管理者”を定義した。ただ、それだけだと総合管理者に管理の負荷が集中するので、各コミュニティ単位に「コミュニティ管理者」という位置付けの“一般管理者”を定義し、それぞれのコミュニティの管理（ユーザの追加や発言の確認等）は、それぞれの一般管理者に委ねられる仕様とした。

総合管理者と一般管理者、いずれの管理機能も、すべてブラウザから操作でき、かつ、このように負荷分散を図ったことで、参加組織のメンバーが無理なく運用できると考える。

また、児童・生徒が誤って個人情報や流したり、いやがらせの投稿などが児童・生徒に精神的ダメージを与えたりすることも懸念されることから、そのコミュニティの特性に応じたセキュリティレベルを設定できるようにした。

「ミーティングボード」では、それぞれのコミュニティに対し、「登録されたメンバーしか読み書きできないもの」「読むのは誰でもできるが書き込みはメンバーしか行えないもの」「誰でも読み書き可能なもの」の3段階の設定を可能とした。

また、各学校やクラス単位で行う「成長/活動の記録」は、例えば、“学校の記録”というコミュニティに属するユーザとしてログインすることで、自分達のデータしか更新できないようにし、間違っても、他校の記録データを消したりしてしまわないように配慮した。

今後は、運用しながら改良を加えていく方針で、まずは、今回用意したシステムを数多くの参加校に利用していただき、現場の声をシステムに反映させていきたい。今年度は間に合わなかったが、来年度4月下旬に予定されている一斉種蒔きを皮切りに、システムの本運用を予定している。



5．活動の課題と今後の展開

今年度は、Web 上で利用するソフトウェアは、教師による試験的運用に留まり、児童・生徒の活動には間に合わなかった。来年度は、新システムを利用して、以下のことに取り組むことが課題となる。

- (1) 掲示板上で児童・生徒の直接対話を通じた協働学習を実現する。
- (2) 参加教師によって設定可能な掲示板システムによって、小プロジェクトの立ち上げを実現する。
- (3) 参加校数増大による活動の沈滞化を克服する方策を探る。

以上のことを目指しながら、「全国発芽マップ宣言 2000」の精神をますます発展させることが、来年度の活動の目標である。